

米欧亜回覧

第42号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集 総務部会

秋の国際シンポジウム基本プラン固まる

―世界の中の日本の役割を考える―

当会設立満十周年の記念事業として計画されている、秋の国際シンポジウムの基本プランがようやく固まった。

三月二日、プレスセンターの会議室で特別委員会が行われ、五百旗頭先生、芳賀徹先生をはじめ当会より泉三郎、山田哲司、水澤周、塚本弘、藤原宣夫、井出亜夫の各氏が参加して討議した。基本プラン、テーマ、発表者、二日間のスケジュールなどの概要が固まった。その主な内容は左記の通り。

*メインテーマ

「世界の中の日本の役割を考える―近代文明を越えるもの―」

*セクションテーマ

- 一・岩倉使節団は日本の近代化に如何にかかわったか
- 二・日本の近代化百三十年における成功と失敗
- 三・二十一世紀のグローバル社会における日本の役割とは

何か

*スケジュール

十一月二十三日、二十四日は国際文化会館を会場に非公開のセミナー。二つのセクションとDVD上映会並びに懇親会。

二十五日は神田の学術総合センターを会場に一般公開のシンポジウム。

なお、予算については諸般の情勢から緊縮方針とし、五百五十万円を想定、国際交流基金、東芝国際交流財団などに申請を行っている。(詳細は四頁)

新映像DVDまもなく完成

四月例会で試写

かねて進めていた新映像のDVDは、当初三月末の完成を目標にしていたが、諸般の事情により一ヶ月ほど制作が遅れている。その理由の一つは、シナリオがふくらみ、映像も増え、百二十分程度と見込んでいたものが百六十分を越える状況になってきたこと、また、そ

の出版調整や著作権許可の手続きに時間を要していることなどがある。しかし、八分通りは出来上がっており、四月二十二日の全体例会には未成品ながらも試写を行う予定。(詳細は五頁)

新年懇親例会

ベルギーテーマで盛会!

二〇〇六年の新年懇親例会は、ベルギーをテーマに一月二十日、日本プレスセンター十階のレストラン・アラスカで開催され、ベルギー大使夫妻をはじめ多数の来賓を迎え、九十名を越す参加者で盛会であった。



2006年新年懇親例会

国際部会スタート

(詳細は二・三頁)

新しい部会「国際部会」の第一回会合が三月三日、虎ノ門で開催され、四十名の多彩な参加者で盛会だった。会はずまず在日外国人二人が発表し、その後、活発な質疑・意見交換が英語と日本語で飛び交い、まさに国際部会らしい幕開けとなった。

新映像・DVDに「岩倉使節団の肖像」を添付するため、肖像写真をなるべく多く集めている。そしてそれを一覽して思うことは、その風貌が概してなかなかカッコよく、凛として品位を保っているように見えることだ。それは何故か、志をもったサムライの姿、基本的教養と儒教的倫理を身につけ、礼節を重んじ、使命感にあふれ、公のために懸命に働く気概がそこにあるからではないかと思う。

いま、藤原正彦氏の「国家の品格」が百万部を越えるベストセラーになっていくという。テレビのヴァリエティ番組でもこの書が取り上げられて、若い世代のタレントたちが面白おかしく「品格」について、雑多な意見が交わされている。そこまでこの書が話題になる背景には、日本人がかつてもっていた美しきもの「品格」をすっかり失ってしまったことへの深い郷愁と強い反省が世代を超えて広く底流しているからに違いない。

凛として生きる品格ある日本人

泉 三郎

名譽や恥を重んじ、金銭に淡泊で、弱者に思いやり深く、卑怯をきらい、公のために命を賭ける覚悟のサムライに求めている。

今、平成の日本の現状をみれば、国家としては、経済偏重、市場主義万能、アメリカ一辺倒、個人としては、親殺し子殺し、無差別殺人、拝金主義、自己中心主義、モラルの欠如、そして若年層の無気力、貧富差の拡大など、そこに豊かさの中の頹廢現象を見て、それへの疑問、憤懣が一般市民の間にも澎湃として惹起しているからではないか。

「品格ある国家」であるためには、「品格ある日本人」が一人でも多くならなくてはならない。道義的な価値を上位におき、むしろ金銭や地位を低位において生きる精神、世のため、人のために働く、無形の価値、徳や美を重んじる人がふえなくてはならない。岩倉使節団とそれを巡る人々の肖像をみるにつけ、まず、われわれ一人一人が「凛として生きる品格ある日本人」であることを目指すしかないと思うのである。

第39回 全体例会

二〇〇六年・新年懇親例会
ベルギーをテーマに盛会!
駐日大使はじめ九十名が参加

平成十八年の新年例会は一月二十日(土)十八時より内幸町日本プレスセンター内のレストラン、アラスカにおいて開催された。

新年例会は、毎年、使節団が歴訪した十二カ国のうちから一カ国を選び、その国をテーマに実施してきた。これまで、米、英、仏、独、伊、スイス、オーストリーの七カ国をテーマ国としており、今年にはベルギーをテーマ国に選ぶこととした。これは愛知万博参加を記念して昨秋、『ベルギー・日本四百年の交流』と題した豪華な本が出版され、改めて両国の四百年に及ぶ交流の歴史が見直されたことに因んだものである。



スピーチに耳を傾ける参加者

(ベルギーは一八三〇年オランダから独立したので、それ以前は日蘭交流史とも云える)。ベルギー王国在日大使館より、ジャン・フランソワ・ブランドルス大使ご夫妻、在日ベルギー・ルクセンブルグ商工会議所よりバート・ウインデリックス氏(ジエネラル・マネージャー)、E.U駐日欧州委員会代表部よりアン・コンフォードさん(広報部アタッシェ)、世界平和研究所理事長(元駐米日本国大使)大河原良雄氏他、各方面からのゲストを交え計九十名をこえる盛会となった。会は恒例の『米欧回覧実記』朗読(岡松暁子さん)から始まり、続いて泉代表から、使節団が一八七三年に八日間ベルギーに滞在し、大変歓待を受けたことなどに触れながらの新年の挨拶があった。この後、来賓紹介を兼ねて藤原宣夫氏の司会により、会員の大久保利宏氏の発声で乾杯し、歓談に移った。

また、大久保利泰氏から寄せられたメッセージが司会から披露された。歓談の後、『ベルギー・日本四百年の交流』をベースに作成されたスライドによる「交流史」が泉氏の解説により上映された。最後に浅沼晴男氏より、日本・ベルギー両国の友好がますます深まることを祈念する挨拶があり、八時三十分過ぎ閉会した。全体司会は山田哲司氏。主なスピーチの内容は以下のとおり。

ブランドルス 大使



新年会にお招きいただき光栄に存じます。また今年のテーマにベルギーを選んでいただきさうれしく思います。私は日本に参りましてから二年経ちますが、昨秋に、『ベルギー・日本四百年の交流』を、また最近、岩倉使節団の『米欧回覧実記』を英文で読む機会があり、百三十数年前の岩倉使節団がベルギーに滞在したことを知りました。使節団は繊維、石炭、鉄鋼などの工場を見学し、また国王にも会っており、久米の観察は、広範にして大変興味深く、面白く読ませていただきました。ベルギーと日本の友好関係が、このように長く続いていくことを改めて、皆さんとともに喜びたいと思います。皆様

大久保利宏氏 (乾杯)



私は一九三一年ベルギーブリュッセル市内の病院で生まれました。父は外交官で、若手の書記官としてベルギー大使館に五年駐在しました。当時の大使館には佐藤尚武大使、芦田均次席、など後に政治、外交で活躍された方々がおられました。ベルギーの日本大使館は英、仏、独、伊、露の五カ国に続きヨーロッパで六カ国目の大使館として開設され、大変

アン コンフォードさん



今日E.U代表部のメンバーとして、お招きいただき大変光栄に存じます。私はデンマーク出身ですが、ベルギーにもう十四年もおりますので、少しベルギー人になっておりますが、ヨーロッパともいえます。使節団のことについては、かねてから興味を持っておりましたので、今日、このような機会に皆さんからさらに多くのことを学べることを楽しみにしております。

大河原大使



新年おめでとうございます。この会では多くの古くからの友人にお目にかかることが出来、うれしく思います。私とベルギーとの関係では、ワシントンに大使でいたころ、ベルギーのシューマーカー大使と親しくしておりましたが、先年、引退した彼の故郷、エルビンと続ある大使館でした。当時のベルギーはコンゴを領有しており、国全体が活気に満ち、皇室間の交流も盛んで戦前が一番よき時代でした。父は大使館員として、ベルギー王宮へもよく招かれたよううで、国王様の書齋にまでご案内いただいたこともありました。また、ブリュッセルは、ヨーロッパの中心として地の利もよく、母は、大使夫人のお供でパリやロンドンへもよく出かけたようです。それでは、日本、ベルギー両国の友好がさらに深まりますことを祈念して乾杯したいと思います。乾杯!(なお、大久保さん所蔵のベルギーに関連する切手、写真などのコレクションも、あわせて展示・披露された)

う町ですが、そこを訪ねて旧交を温めたことが思い出されま
す。外交官をしていたことの喜
びは、このように引退後も、広
く世界中に知己がいて、カード
の交換などをして友情を確か
めることが出来ることでしょ
う。

ところで、この会では今後の
日本を考える分科会があるそ
うですが、大変意義深い会であ
ると思います。元気で、さわや
かな日本の実現にはどうすれ
ばよいか研究し、提言してほし
いと思います。私も先年『日本
の品格』という本を書きました
が、日本が信頼される、さわや
かな国になってくれることを
願っています。

多田幸子さん



私はオランダのハーグにお
りました頃、ベルギーのハビオ
ラ王妃との出会いがありまし
た。本場にすばらしい方で、懂
れ、尊敬し、また、そばに
だけでも癒されるようなお人
柄でした。その後もお目にかか
る機会があり、以前差し上げた
友禅の振袖の柄まで覚えてい
ただいて、本当に感激いた
しました。振袖は未婚の女性
のものとして聞いていますが、既婚者

の私になぜ振袖なのかという
ご質問に、どうお答えすればよ
いか迷ったことも懐かしい思
い出です。

■大久保利泰氏からのメッセー
ジ要旨(山田氏代読)

新年おめでとうございませ
う。今年のテーマがベルギーとの
ことですので、ベルギー王国と
大久保家のご縁を紹介いたし
たいと思います。

大久保利通の元の私邸が明
治から大正時代のベルギーの
公使館となっていました。場所
は現在の霞ヶ関、特許庁から首
相官邸のあたりでしょうか。当
時としては珍しい洋館で、明治
九年(一八七六年)一月に完成
し、四月には明治天皇の行幸を
仰ぎ、利通は日記に「まことに
光栄なこと」と記しています。

利通の死後、この洋館はベル
ギー王国に譲り渡され、明治三
十六年には、コンドルが改装を
手がけたと、『ベルギー公使夫
人の明治日記』に書かれていま
す。

話は二十年ほど遡りますが、
明治六年二月岩倉使節団がブ
リュッセルを訪れたとき接待
員をつとめられたダヌタン男
爵は、その後、同年六月には書
記官として日本公使館に着任、
明治二十七年には特命全権公
使となり、日清戦争に際して、
米国人記者が捏造した記事を
指摘、誤った対日観を変えて下
さいました。日本にとって忘れ

てはならない方だと思えます。
第一次世界大戦のときは、日
本はベルギー王国に、関東大震
災の折にはベルギー王国は日
本に対し支援活動を行った話
も耳にいたしました。

このようにベルギー王国と
は一世紀以上にわたり深い絆
で結ばれており、今後もこのよ
うな交流が続きますことを
願っております。(関連して『ベ
ルギー公使夫人の明治日記』長
岡祥三訳、中央公論社、一九九
二年刊、『日本・ベルギー関係
史』磯見辰典、桜井良樹、黒澤
文貴、白水社、一九八九年刊、
もあわせて展示・披露された)

をスライドで紹介(泉氏解説)

このスライドは愛知万博記
念に出版された『四百年史』の
一部を紹介するもので、この本
以外からも数枚の写真を加え、
全体で約三十枚の画面に構成
されたものである。江戸時代か
ら始まる両国の交流史が、美し
い絵画、地図、写真、イラスト
を使って紹介され、興味ある内
容となった。なお、このスライ
ドは今回の例会にあわせて、急
遽、泉氏を中心に作成されたも
ので、会員の足立光正氏、小林
養丈氏、橋本吉信氏の協力が
あったことも紹介された。

(文責) 山田哲司



受付風景



『実記』朗読(岡松さん)



日本語で挨拶する在日ベル
ギー・ルクセンブルグ商工会議
所のバード・ウインデリック氏



開場前の演奏



山田氏と「交流史」を見る
ベルギー大使夫妻



青年部会メンバーも多数参加
(泉氏、浅沼氏と一緒に)



(写真) 橋本吉信

スライドを鑑賞

設立満十周年記念

国際シンポジウムの概要

開催は、十一月二十三〜二十五日

今秋十一月に予定されている、当会設立十周年記念・国際シンポジウムの特別委員会が三月二日、午後五時より、日本プレスセンタービルの会議室で行われた。

参加者は芳賀、五百旗頭の両先生と、泉三郎、水澤周、塚本弘、藤原宣夫、山田哲司、井出亜夫の会員六名、計八名であった。なお、海外出張中で当日欠席された松本健一先生には、後日、泉、山田、井出の三名と打ち合わせを行い、全体の調整と意思統一を行った。

現時点ではまだ報告者やテーマ、誰がどのセッションで報告するか、司会が誰が担当するかなど未定の部分があるが、おおよその概要は左記の通りである。

一・開催趣旨

日本の近代化を、岩倉使節団を基点として省察し、その後の百三十年にわたる近代化における日本の成功と失敗を振り返り、さらにはグローバル化の進む現在の世界における日本の役割を考えようというものである。

それは英米主導の近代西洋文明の功罪、つまりプラスとマ

イナスの評価に言及し、近代文明を越える普遍的な価値の探求をめざすことになるだろう。そこには、欧米的思考ではない、アジア的思考や日本的な発想、そうした視点が重要性をもつものと思われる。

その観点から、今回のシンポジウムには、アジア各国からの参加者を多く招聘することになった。

二・日程

◆ 第一日

十一月二十三日(木、祝)

国際文化会館 講堂

・ 十三時〜十六時三十分

セミナー・第一セッション(途中休憩十五分)

・ 十七時〜二十時

DVD「岩倉使節団の米欧回覧」上映

◆ 第二日

十一月二十四日(金)

国際文化会館、講堂

・ 十時〜十三時

セミナー・第二セッション

・ 十四時〜十七時

セミナー・第三セッション

・ 十八時〜二十時

懇親パーティー

◆ 第三日

十一月二十五日(土)

一橋学術総合センター

・ 十時〜十二時

講演

・ 十三時〜十六時

第二部

全体討議(パネルディスカッション)、質疑応答、まとめ

十一月二十五日(土) 一橋学術総合センター 第一部 講演 十三時〜十六時

第二部 全体討議(パネルディスカッション)、質疑応答、まとめ *セミナーは、基本的には会員を対象とし、シンポジウムは一般公開とする。

三・セミナーのテーマと報告者



芳賀徹先生 (第1セッション 基調報告)

◆ 第一セッション・テーマ

「岩倉使節団は日本の近代化に如何にかかわったか」

〔基調報告〕

芳賀徹(京都造形芸術大学学長)

〔報告者〕

四名、各人十五〜二十分、

テーマは仮題

水澤周(著述家、会員)

「米欧回覧実記の今日的意義

―現代語訳を完成して―」

斉藤希史(東京大学助教授)

「漢文脈の中の米欧回覧実記」

殿安生(大手前大学教授) 「近代の留学生について」



五百旗頭真先生 (第2セッション 基調報告)

◆ 第二セッション・テーマ

「日本近代化百三十年における成功と失敗」

〔基調報告〕

五百旗頭真(神戸大学教授)

〔報告者〕

三〜四名

各人十五〜二十分、テーマは

仮題

バクティアル・アラム(インドネシア大学日本研究所理事)

「アジアの近代化と明治維新

―その意義と限界―」

ケント・カルダー(ライシヤワーセンター理事長)

井出亜夫(日本大学大学院教授、会員)

「東アジア共同体と日本近代化の経験」

ウイリアム・ステイール(国際キリスト教大学教授)



松本健一先生 (第3セッション 基調報告)

◆ 第三セッション・テーマ

「グローバル社会における日

本の役割とは何か」

〔基調報告〕

松本健一(麗澤大学教授)

〔報告者〕

三〜四名

各人十五〜二十分、テーマは

仮題

国分良成(慶應義塾大学教授)

「東アジアから見た日本と日本から見た東アジア」

塚本弘(JETRO副理事長、会員)

「東アジアの経済発展と日本」

四・国際シンポジウム(公開)

メインテーマ

「世界の日本の役割を考える」

―近代文明を超えるもの―

◆ 第一日

講演(約二時間)

〔講師〕

芳賀徹、五百旗頭真、松本健一

の三名

全体討議、質疑応答

◆ 第二日

(約三時間)

〔パネルディスカッション〕

芳賀、五百旗頭、松本および

会を代表して泉

崔相龍(高麗大学教授、元駐日韓国大使)

アフターブ・セット(元駐日インド大使)

周見(中国社会学院 世界経済研究所教授) 国分良成(慶応義塾大学教授) 他

岩倉使節団の米欧回覧(DVD版)完成間近

新映像「岩倉使節団の米欧回覧」(DVD版)の制作は、諸般の事情により約一ヶ月遅れ、なお未完成のままだが、四月二十二日米欧亜回覧の会の総会で試写を行うこととなった。

新作品は、シナリオもふくらみ、当初の予定の百二十分が百六十五分(二時間四十五分)に膨張することになった。なお映像については約五百画面の画像収集をして、新画像の追加ならびに、同一画像もよりよい品質映像への差し替えを行った。

映像製作において最も時間を要したのは、資料の出版・権利者確認であったが、大半の資料については出典が確認され、その使用許可も得たので、いよいよ一般への市販も可能になる。新映像は九章で成り立っておりその構成は次の通りである。

- 一. 岩倉使節団の出発(約十四分)
- 二. 新しい国アメリカ、大陸横断鉄道の旅(約十七分)
- 三. ワシントン滞在と東部回覧(約二十二分)
- 四. 最盛期の米大英帝国を往く(約二十分)
- 五. 英国の光と影(約十五分)
- 六. 麗都・パリとフランスの底力(約十七分)

七. 新興ドイツと大国ロシア、そして小国の知恵(約二十七分)

八. 西洋文明の源流イタリア、そしてアルプスの国へ(約十八分)

九. 中東・アジアの植民地帯回覧、そして帰国(約十五分)

なお、DVD化したことで映像はより鮮明になり、どの章からでも自在に鑑賞できるようになった。

またDVD巻末には「肖像写真集」岩倉使節団の群像とそれをめぐる人々」を添付する計画で、目下その制作を進めている。これはそれぞれの肖像写真に簡単な略歴を付したものであるが、その紹介総数は百名に達する予定である。いろいろの形でこの使節団にかかわった人々を知ることによって、岩倉使節団への理解も一層深まるものと思う。

- 一. 岩倉使節団、大副使とその随員
- 二. 各省理事官とその随員
- 三. 随行留学生
- 四. 在外駐在員及び留学生、民間人
- 五. 訪問国の元首、要人

■幹事会からのメッセージ 新会員の皆さんへお願い

三月二十七日(月)、新会員を迎えての懇親会がプレスセンターのレストラン「アラスカ」の一室で行われた。

ビールも入り食事もしながらの自由な雰囲気での雑談はなかなかいいものであった。

また、新旧会員二十名ばかりの出席だったから、ひとわたり自己紹介も出来、それにまつわる質疑の応答もあって、お互いが知り合う上でとてもよかったと思う。

やはり、親しくなるには飲み食いがあること、自由にダべれる雰囲気があること、あまり多人数でないことなどが必要である。会では、全体例会の時にはいつも懇親パーティを催すようにしているが、二次会でこそリラククスした交歓がなされ、発言の機会もあり、親しくなれることから、なるべく出席してほしい。

それから、毎月の催しでは、「実記を読む会」と若い世代にとくに「青年部会」が一番のおすすめである。決して難しい会ではなく、誰でも入りやすく話題も多彩で、面白い会である、是非気軽のぞいてください。

なお、歓迎懇親会に参加の新会員は、山下靖典、大平忠、石坂芳男、庵原義文、長島脩一郎、津田昭、斎藤基三郎、藤川鉄馬の八名。(順不同、敬称略)

… 展示会のご案内 …

日本のヨーロッパ発見

—1872-73年に岩倉使節団が見聞した

ヨーロッパの多様性と統一性

本展は、本年4月24日に開催される日本EU首脳会議開催を機に開催され、岩倉使節団が訪れたヨーロッパ諸国で目にした光景をパネルによって紹介するとともに、国立国会図書館所蔵の資料から、伊藤博文の手記等の関連文書が展示される。

会期：平成18年4月25日(火)から同年5月10日(水)まで(日曜・祝日を除く)

開場：午前9時30分～午後5時
会場：国立国会図書館 新館1階 展示室
(千代田区永田町1-10-1)

主催：国立国会図書館および駐日オーストリア大使館

協力：久米美術館

協賛：欧州委員会代表部、英国大使館、ベルギー大使館、オランダ大使館ほか

監修：ペーター・パンツァー(ボン大学教授)

■総務部からお願い

事務スタッフを求めています

活動を活性化させるためには事務局の充実が緊急の課題である。

当会がNPO化されてから一年九ヶ月が経過し、この三月で二回目の決算期を迎えることが出来た。しかしながら、十七年度の決算は若干の赤字となる見込みであり、今後、より堅実な決算を行うためには、収入のアップ、とりわけ会費収入の増加を図らねばならない。そのためには、新会員の加入に力を入れなければならないが、その有力な手段であるホームページの更新もままならず、各種の会員サービスも行き届かないのが現状である。その意味で会の

会員の皆さんの中で、事務局の仕事を手伝っていただけたい。今年度は国際シンポジウムの開催やDVD活用の他、新しい企画もいくつかたてられている。

会員でなくても、在宅でも結構であり、意欲的でパソコン操作に堪能な方を探している。若干ながら謝礼を用意することも検討している。事務局までご連絡くださいれば幸いです。

(山田哲司)

薩摩歴史ツアー実施へ

二〇〇六年の歴史ツアーは、薩摩へ五月十八日〜二十日の二泊三日の日程で左記の通り催すことになった。参加者は、現時点で約二十名。

〇五月十八日(木)

八時羽田発・九時四十五分鹿児島着(JAL)
専用バスで東市来・美山へ。
・美山・沈壽官工房見学
午後、鹿児島市内・歴史施設見学。

・鹿児島維新古里館、西郷隆盛生誕地、城山展望台、南州墓地 など

十七時ホテル着

熊襲亭にて薩摩料理(夕食)
泊(いわさきホテルザビエル450)

〇五月十九日(金)

専用バスにて鹿児島市内歴史施設見学。
・鶴丸城、黎明館・鹿児島歴史資料館、仙巖園、尚古集成館、薩摩切子工場 など
十六時、南薩摩・指宿へ出発。泊(指宿いわさきホテル)

〇五月二十日(土)

専用バスにて山川港へ出発。山川港、池田湖、坊津歴史資料館 など
知覧へ移動。
・知覧武家屋敷、知覧特攻平和会館 などを見学
十九時四十五分鹿児島発・二十一時二十分羽田着(JAL)

実記を読む会報告

連絡 クラウンインターチェンジ

Tel 03-5469-2090 Fax 03-5469-2093

info@crown-interchange.com



■第九十二回

一月十九日、出席は十五名。第四十九巻ベルギー国総説。担当の三原さんは長らくベルギーに仕事で在住経験があり、大変詳細に、その概況(地形、人口、面積、GDPなど)、歴史及び歴代国王、憲法・立法・行政、鉄道、農業・牧畜・工業・貿易、言語・宗教・教育など幅広く解説された。

■第九十三回

二月九日、新しい参加者二名を含む十九名が参加。第五十巻ベルギー国の記上を小菅さんが発表。ベルギーを訪れた二つの使節団の比較、十九世紀ベルギーの工業力、ベルギー政府が使節団の受け入れに関心を示した理由、製鉄小史など。

次に、小野さんがベルギー国の記下、西欧人と日本人の事業に対する計画性の差異、ガラス工房、製鉄所、ブリキ工場、寄木細工工場、針工場の視察、ワートルロー戦記、アントワープ港など『実記』に沿って発表。その後十七年間日本に在駐した夫と共に日本に住んだ公使夫人の「ベルギー公使夫人の明治日記」の紹介があった。

■第九十四回

三月九日、出席者十六名。第五十二巻オランダ国総説を桑名さんが発表。用意された資料は、自然と住民、この国の成立史・立法・行政(オランダ共和国、ネーデルラント王国)、国土造り(堤防とポルダー)、産業、日蘭関係(基本、オランダ小官庁の江戸参府、オランダ風説所、世界への窓「出島」、長崎海運伝習所、日蘭和親条約締結、海軍伝修生選抜、咸臨丸登場)及び日蘭交流四百年―鎖国時代にも唯一開かれた西洋文化の窓、など。

二十時より二十二時三十分までは、今後の読む会の運営について一人一人の意見を聞き、今後の代表幹事として桑名さん、補佐として西井さん、麻生さんが決まった。また、十年間にわたって続けてきた運営に一区切りつけ、五月以降は食事の手配はなくなる。会場も、暫くは従来通りクラウンインターチェンジで開催するが、都合によって変更されることもあり注意されたい。

■第九十五回

四月六日、出席者十七名。第五十三巻ハーグ、ロッテルダム及びライデンの記を西井さんが発表。資料として本巻の要約、興味ある周辺事項の解説、芝蘭堂「オランダ正月」の参加人物特定イラストなど。続いて、正木さんが第五十四

巻アムステルダム記の発表。使節団の訪問先を簡潔に説明、ついで、使節団との対比として「文久二年遣欧使節団」一行の動静を示す図表で、オランダでの訪問先、応接の親密ぶりを解説。(読む会案内FAXより)

英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

zaa96087@oak.zero.ad.jp



■一月例会

二十六日に第三十四回読む会を開催。出席者は八名、第二巻イギリス篇の二十六章の半ばから終りまでを朗読した。当時のリバプール港のドックの様子や倉庫の構造、機械装置などについて、久米の描写からあれこれイメージが浮かび、議論に花が咲いた。

■二月例会

二十三日に第三十五回読む会を開催。出席者は六名、第二巻イギリス篇の二十七章の始めから半ばまでを朗読、リバプール港のドックで建造中の船の見学、起重機(鶴頸秤)の構造と有用性、造船の手順、海員養成学校などについての記述を読み進んだ。

■三月例会

二十三日に第三十六回読む



コルカット先生を迎えた3月例会

会を開催。メンバー出席者は九名、今回は偶々来日中のプリンストン大学のコルカット先生が参加された。先生は、『英訳実記』の第一巻米国篇の訳者であり、前回シンポジウムにも講演者として参加されている。今回は英文の『実記』を読む作業は行わず、先生から、翻訳を担当するに至った経緯や、翻訳作業の苦勞(久米の難しい漢語や原文のニュアンスを出来るだけ生かして訳すなど)を始め、当時の新聞記事などの資料から使節団に接触した人物の背景を調べたり、宿泊ホテル、訪問先などを实地に検証して、久米の記述の裏づけを取ったことなど大変興味深い翻訳裏話を伺った。特に使節団を大歓迎したサンフランシスコの銀行家たちの人物像、経歴や使節団に対する思惑などが紹介された。

(文)小林養丈



国際部会報告

連絡 井出 亜夫

ide@gsb.nihon-u.ac.jp

第一回国際部会は三月三日約四十名の参加の下に開催された。

外国メンパーとして、慶応大学に訪問教授として来日中のコルカットさん(英語版『実記』第一巻翻訳者)、

パーペさん(EU)、リケさん、陳肇ブさん(中国)、イージョングクさん(韓国)、アルセンヌ・グロジャさん(コンゴ)が参加。

討論テーマは、リケさんより Comparing Japan and China in Institutional Duplication and for Technological Duplication およびパーペさんより Europe and Japan Conflict and Cooperation in Governance

リケさんは、岩倉使節団に若干遅れ、当時清朝政府も同様な意図の下に調査団を欧米に派遣するもその成果を導入する国内的基盤を欠いていたこと、近代化におけるこうしたアジアの試みに加え、グローバル社会における現代的課題等について説明。また、パーペさんは、西欧デモクラシーと日本との比較、今日におけるアジアとヨーロッパの交流等について説明。

両論に基づき意見交換に入ったが、大きなテーマ、入念な説明に対し、議論の時間に制約もあり、発言者からは別途井出宛に整理された論旨をペーパーで提出していただくことになっていく。

リケ説明に対しては、日本社会の外国文化・文明受け入れの柔軟性に対して中国の対応がそのコントラストをなす点、発展途上国および日本の今日的課題について議論が及んだ。一方、パーペ論については、西欧デモクラシーのプロトタイプに対しアジアにはこれと違つた多様な展開があることが主張され、この問題は、西欧近代とその超克という議論にも及ぶものであり、グローバル社会の下で今後、新しい議論の深まりが期待されるものである。

国際部会の発表、議論は、会議事を取り纏めることになっており、日本大学大学院国際関係学部小松優香さんを中心に取り纏め作業がなされている。

次回会合は、五月十一日(木)プリンストン大学コルカット教授と、ラビンダー・マリツクさん(インド・タゴールの対日観察を中心として)のプレゼンテーションを中心に議論する予定。

国際部会はこうした運営で行いたいと思いますが、在日外国人で相応しい方がおられま

したら、アソーシエイトメンパーとしては是非ご案内下さい。(文) 井出亜夫

青年部会報告

連絡 山本 陽子



mase@yhb.att.ne.jp

第五回小セミナー

二月十四日(金)に、神戸大学教授の五百旗頭真先生を講師にお迎えし、第五回小セミナーを開催した。以前の米欧亜回覧の会総会の時は明治以来の日本の近代化をお話いただいたが、今回の演題はその時のテーマに続く「戦後日本―経済国家の栄光と挫折―」で、戦後六十年の日本の流れを、日本の相手がアメリカであったことに焦点を当ててお話し下さった。アメリカの対日占領政策における天皇制の維持と民主化移行政策の関係、冷戦後の日本の位置づけ、アジアにおける日本等、現在の日本につながる貴重なお話を伺え、有意義であった。

当日はオブザーバーやゲストの他に、先生のゼミの卒業生も数名参加して下さい、総勢二十七名の参加があった。時間を延長しての大講演会となったが、その後懇親会も開かれ盛会であった。

(文) 岡松暁子

第六回小セミナー

四月七日、新年度になって初代会合ということもあり、初参加者五名を含む青年部会メンパー十四名とシニア・オブザーバー五名の計十九名の参加があった。

スピーカーには青年部会メンパーの大久保利通さんのお父様で利通氏から数えて四代目にあたる大久保利泰氏を迎えた。「大久保利通のちよっと面白い話」というタイトルで、大久保利通宅がベルギー大使館になった経緯や使節団としての日常生活についての話が中心であった。『実記』を読むだけでは知ることが出来ない、大久保利通の写真好きな一面や、洋菓子好きの家族の光景など、親近感が湧くようなトピックを次々お話しされた。あわせて持参された当時の地図やコトサートプログラムなどの資料にも参加者一同くぎ付けとなった。

セミナー後の懇親会にも多数ご参加いただき、今度は直近の政治、経済、教育などの話題で大いに盛り上がり、思い出深い新橋の春の夜となった。大久保様、ご参加の皆様、本当にありがとうございました。

(文) 上野恵美子

*五月十二日の現代語訳を読む会、読書箇所は第二十三章(第二十五章「ロンドン市の記」上、中、下を予定。



関西支部報告

連絡 北村 彰一

shou1@f7.dion.ne.jp

例会報告

一月二十日、十三人が参加。

『実記』輪読は米国ワシントン府の章から始めたが早々に切り上げて、岩倉使節団の出発直前に断行された「廃藩置県」との関連で『実記』の時

代を知ろうと、NHKの歴史番組のビデオを観て意見を交わした。「取り敢えずは海外視察も続けることが出来たほど、英国公使が驚くように国内に混乱がなぜ噴出しなかったのか」との疑問が出た。

『実記』編纂の影の功労者である畠山義成が話題に上った。冷静な分析的思考の畠山は、アメリカの諸制度のみならずアメリカ社会の本質を的確に捉えており、しかも欧州との歴史的な経緯を踏まえた大西洋の視点からの分析や見方として回覧実記の随所に反映されたと考える。

例会の後、場所を移して懇親会を持ったが、西郷隆盛や山県有朋の話を引きつかけに終戦までのことまで話が広がり、戦中派、戦後派を問わず口角泡を飛ばさんばかりの熱意での談論風発となった。

(文) 難波 康熙

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。
- 会員** 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回くらい全体例会をもちます。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史、現未来、総務部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には準会員(年会費3,000円)の特典もあります。

事務局 「イズミ・オフィス」に置きます。
〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込
入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会



.....ホームページのご案内.....

- ◇米欧回覧ニュース第1号からのバックナンバー など
- * 皆様のご意見をお聞かせ下さい

<http://www.iwakura-mission.jp>

<催し案内>

2006年4月～6月の予定です

☆4月全体例会

日時: 4月22日(土) 13:00~20:00
場所: 国際文化会館講堂(港区六本木5-11-16)
内容: 一部 総会 13:00~14:00
二部 「岩倉使節団の米欧回覧」 映写
三部 懇親パーティ 18:00~20:00
会費: 3000円。懇親パーティ別途(3000円)

☆実記を読む会

日時: 5月10日(水) 18:30~21:00
6月8日(木) 18:30~21:00
場所: 南青山クラウンインターチェンジ
会費: 1000円(夕食等はありません)
*7月6日(木) 18:30~21:00 の会場は国際文化会館(E室)となります

☆英訳実記を読む会

日時: 5月25日(木) 18:30~21:00
場所: 財)統計研究会会議室
港区新橋1-18-16 日本生命ビル7階

☆現未来部会

日時: 5月16日(火) 18:30~21:00
場所: 日本貿易振興機構(ジェトロ5階会議室E)
テーマ: 日本のあり方を考える
報告: 泉三郎氏

☆国際部会

日時: 5月11日(木) 18:00~20:00
場所: 地球産業文化研究所(虎ノ門)
テーマ: 岩倉使節団と日本の近代化(コルカット氏)
タゴールの日本の近代化への観察(マリック氏)

☆青年部会

◆ 現代語を読む会(ロンドン市の記)
日時: 5月12日(金) 20:00~22:00
場所: 財)統計研究会会議室

☆関西支部例会

日時: 4月18日(火)

編集後記

◇ 固まってきた十一月の国際シンポジウムの基本プランをみると、二〇〇一年の国際シンポジウム開催前の熱気が蘇えつてきます。これから半年間は、全員の力の結集が求められる、当会の大事業の準備期間となります。

◇ 四月の「実記を読む会」報告は、第九十五回です。即ち、八月の夏休みを入れると秋の国際シンポジウムの前月に第一百回に到達することになります。時によってメンバーの数が変化し、同行した多数の留学生を各国に残しながらも、使節団が岩倉使節団であり続けたように、「実記を読む会」は当会の活動そのものです。

◇ その継続を支えに、当会はNPO法人となり、新しい力を続々と生みだしてきました。まず、新部会の青年部会や国際部会には、国際シンポジウムを支える行動力が期待されます。また、映像も十年前には考えられなかったDVDとなり、形も内容も格段に進化します。

◇ しかし、完成間近のDVD製作では足立さんが徹夜で奮闘し、NPO運営には総務部会の献身が支えです。NEWS発行も連続して遅れ、迷惑をかけています。ご協力を切に願います。